

新恵 美佐子

一九六三年、大阪市生まれ。一九八九年、多摩美術大学大学院修了。団体に所属せず、個展やグループ展を中心に活動する。インドを繰り返し放浪し、そこで得たテーマを題材に制作している。二〇一八年の中村屋サロン美術館の個展では、墨の大作を発表。二〇一九年にはインドにて個展を開催。

青山 日本画というと横山大観の作品や近代の名画を連想して、若い人は現代日本画に中々興味・関心が薄いのではないかと思ひ、今回「日本画の逆襲」という少し尖ったタイトルの展覧会を開催しました。最初に出品をお願いした時、どう思いましたか？

新恵 美術館に飾っていただけで広く作品を人に見ていただけると大変嬉しく思いました。この美術館に飾らせていただくのは二度目になります。広くて大好きな美術館ですので、こちらに飾らせていただき本当に感謝しております。

青山 二〇〇八年の「いま、日本画は」という展覧会で、沢山の作家さんとあわせて新恵先生の作品を出品しました。その時も「現代日本画とは何か」を問いかける展覧会でした。今回は二〇〇九年から二〇一四年までの四点の作品を出品しています。タイトルが全部「揺籃」。ゆりかごというタイトルが共通していますが、これは割と近年のテーマとして描かれています。

新恵 インドに通って約三十年になります。明治時代、インドにロビンドラト・タ



ゴール（註一）という、特にベンガル地方では神様と崇められている偉大な文人がいました。タゴールのギタンジャリという詩の一節に「生と死の海の揺籃」という詩があります。ゆりかごのように、生と死の海でその生命がたゆたう、浮かんで揺らめくイメージの詩なんです、それを作品のテーマとして描いています。

青山 その前の豊橋市美術館での「トリエンナーレ豊橋 星野真吾賞展」に出品していた作品は「花」というタイトルでしたが。

新恵 「花」と「揺籃」、タイトルは違いますが内容に大きな差はありません。植物は種から新芽が出て育ち、葉をつけて花を咲かせます。その花が咲く時の一時の状態を切り取り「花」をタイトルに使っています。花はやがて枯れて、種となり、種は地面に落ちて、また次の生命が生まれる。生と死が繰り返されていく。テーマは「繰り返す生命」重々しくいうと「輪廻」です。インドでは多くの人が輪廻転生を信じているようで、私の作品はかなりインドの影響を受けていると思います。

青山 ここで簡単に新恵先生の経歴をご紹介します。ご出身は大阪、多摩美術大学で大学院まで進みました。個人的には多摩美術大学はすごく自由な雰囲気な学校と感じます。東京藝術大学が東京美術学校の時代から歴史が長く真面目な感じ、武蔵野美術大学も割と堅実な感じとか。多摩美術大学の自由な雰囲気な学生時代を過ごしてみようでしたか？

新恵 やっぱり多摩美はかなり自由でした。今はちょっと違うかもしれませんが、当時は放つたらかし、好きに描かせてくれるという自由奔放な気分でした。私は大阪出身で、市立工芸高校の美術科を卒業しています。高校在学中から、自由に描きたいと

註一 ラビンドラト・タゴール（一八六一―一九四一）インドの詩人・小説家・思想家

いう希望が強かったので、そんなイメージだった多摩美を選んだように思います。

青山 多摩美術大学を修了後、公募展には参加せずに個展やグループ展中心に活動してきたことですが、例えば日本画家の多くは、大学なり色々なところで出会った師匠がいて、師が出している公募展に自分も出品する流れが主と思います。そういったコースは全く意識しませんでしたか？

新恵 実は画歴には書いてないんですけど、在学中に一度だけ日展に出品したことがありました。

青山 そうでしたか。卒業してから、今神奈川にアトリエをかまえていますけど、随分長く使っていますか？

新恵 一九九四年から使っています。友達と数人で使い始めた共同アトリエでしたが、今は二人になりました。

青山 インドに長く放浪していましたが、ポーラ美術振興財団の平成九年の在外研修で一九九八年〜九九年の一年間、ずっとインドに滞在。それが一番長期滞在でしたか？

新恵 一番最初の長期滞在は大学を卒業してすぐインドへ行って、約一年、インドだけでなく隣国を含め、放浪しました。期間が長いので、今も訪問というより放浪の方がびったりきますね。

青山 今回出品している作品は、使っている素材が実はキャンバス。墨、顔料をアクリルで定着させています。日本画の伝統的な描き方としては、岩絵具註二と膠註三（註三）を使うのですが、新恵先生も大学では膠を使った仕事を？

新恵 そうです。

青山 それがアクリルとキャンバスといった材料に転換していったきっかけは？

新恵 インドでは日本画の材料は手に入らないので、その場所で手に入る画材で絵を描いていたら、このようになりました。日本画の画材でなくてはならないというこだわりはないですね。ではなぜ「日本画の逆襲」展に出しているのかという理由は後で説明させていただきます。

青山 日本画を日本画たらしめているものは一体何なのか。素材が日本画の画材だったら日本画と言えるのか、それとも作家が「日本画」と思っていたらそれは日本画なのか、そもそも伝統的な日本画の画材とは何かを考え始めると実は結構ややこしい問題で、日本画の画材そのものが近世と近現代で断絶しています。

たとえば先ほどさらっと「岩絵具」を、鉾物を砕いたものと言いましたが、厳密に天然の岩絵具と言えるのは群青註四と緑青註五のわずかに二種類だけなんです。じゃあ今の日本画家たちが使っている非常に美しい、発色のよい、宝石のような砂の絵具は何なのかというと、近代の工業製品で、金属等で発色させた色ガラスを砕いてつくる新岩絵具と言われるものです。ものすごく綺麗な発色の画材ですが、昔の人たちはそういう豊かな画材を使って描いていたわけではない。けれども、近世以前の作品は画材の制限を感じさせない豊かな世界が広がっています。画材そのものも随分昔と違うのに、では日本画って一体なんなんだろうと考え始めると、迷路に入ったように出口が見えなくなってしまうんですね。

それでも、現代の日本画として描いている作家の色々な作品を集めることで、日本画の本質というか根源的などころをそれぞれの作家がどう考えているのか、私の悩

註二 鉾物を砕いた新井顔料

註三 動物の骨や川を煮てつくるコラーゲンのような成分をもう一度水でふやかして、煮溶かして接着剤として使う

註四 藍銅鉱、アズライト
註五 孔雀石、マラカイト

みにも何かヒントが出るのではないか。そういう気持ちでお声掛けしました。

新恵 何を以て日本画かということ。日本画にほとんど興味のない方々からは色々な答えが返ってきます。墨絵（水墨画）とか、水彩画のことでしょうか、なんかちょっと高い絵具使うでしょとか。日本画という言葉は明治時代にできた言葉なんです。日本が一気に西洋化を始める時代、油絵具も入ってくる。岡倉天心はフェノロサと一緒に日本のオリジナルのものをつくろうとしたときに、フェノロサが「Japanese Painting」と言ったのを「日本画」と和訳した。それが今も使われているんです。西洋画に対してできた言葉が日本画で、一時は明治から戦前まで、花鳥風月を中心に、今おっしゃったような材料で描く日本画なんですけれども、戦後になると、花鳥風月だけではなくて、題材がもっと幅広くなり、表現の方法もどんどん変わってきます。その頃「日本画滅亡論」が登場、日本画とは何かの答えは出ないまま今に至っています。

私は、ほぼ毎年インドに行っているんですが、最近自分にとっての一つの答えをインドで見つけたように思います。日本画が生まれた時期、岡倉天心はロビンドロナト・タゴールと交流していて、タゴールがインドに天心を呼びました。その後、天心の導きで横山大観、菱田春草もインドに行っています。同じ頃にインドにも西洋化の波が押し寄せていました。それまでインドにはミニアチュール（細密画）やラージプー卜絵画などの伝統絵画があります。急激な西洋化に対してベンガル地方で、インド独自のものをつくり出そうという運動が起こったのは、日本のそれにとてもよく似ていましたし、実際に大観や春草が持ち込んだ「朦朧体」が大きな影響を与えることになりました。インドではイギリス人のハヴェル（註六）という人がフェノロサの役割を

果たしてベンガル派絵画が誕生しました。

誤解を承知で私個人の結論を言いますと、「日本画も西洋画も境目が無い」ということになります。それはどうしてか。岡倉天心が東京美術学校を追われた時、洋画の代表は黒田清輝でした。黒田清輝の代表作《湖畔》は、水辺で浴衣を着た女性が涼しげにうちわで扇いでいるという油絵です。ものすごく日本的なテーマを油絵で描いているんです。かたや日本画の材料を使って描く作家、例えば竹内栖鳳がターナーやコロから強い影響を受けて、西洋の写実画法を取り入れて日本画を描くんです。全く西洋的な日本画と全く日本的な洋画、この差はなんだろうと、日本画でも洋画でも一回転していいんじゃないかと、洋画のことを日本画といっても構わないのではとも思っています。それは、インドでラヴィ・ヴァルマ（註七）の作品を見た時の事です。イギリス人画家から油絵を教わったヴァルマはインドの西洋画の父のような存在で、油絵具を使って美しいインドの女神、ヒンドゥー教の神々、インド神話等を描いているんです。ものすごくインド的でインドの魂を油絵具で描いているにもかかわらず、西洋画とみなされていることに、違和感を覚えました。日本とインドをシンクロして考えるようになってから、日本画、西洋画を画材の違いだけで分けるのは何か違うような気がします。一部では、日本画というのをやめようじゃないかといった話もあると聞きますが、自分にとっては「日本画の逆襲」というタイトルはまさに「逆襲の逆襲」、一回転して元の位置の近いところに戻っているように思っています。今は日本画という言葉にロマンさえ感じ、ベンガル派の画家たちも憧れ影響を受けたとされる日本画を肯定的に見ています。「日本画の逆襲」というタイトルの受け止め方は様々で、全

註六 B・B・ハヴェル（一八六一〜一九三四）イギリス人。マドラス美術学校、コルカタ政府美術学校の学長

註七 ラジャ・ラヴィ・ヴァルマ（一八四八〜一九〇六）インドの画家



新栄美佐子『播磨』二〇一三年

作家が違う受け止め方をしていることだと思いますけれども、私は「逆襲の逆襲」で元に戻ったタイプの人間だと思います。

青山 タゴールの話は過去のインタビューでも伺っていましたが、ベンガル絵画の話はつい最近ですよ。これは私にとっても、インドの状況を全然知らなかったので、非常に勉強になりました。振り返ってみると、明治の菱田春草も日本画、洋画という呼び方そのものがなくなって、すべて一本化した「日本の絵画」と呼べばいいのではないかと、「絵画について」というエッセイの中に残しています。一五〇年回って、やっぱり菱田春草の言った時点に戻っているんじゃないかというのを今ひしひしと感じました。